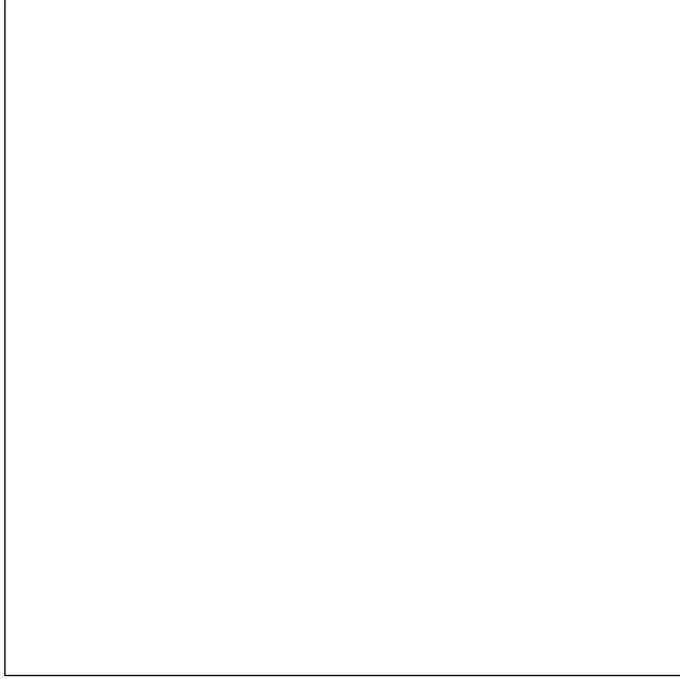


ミッドサイズの仕返し



-  Zulu folktale
- Wiehan de Jager
-  Akiko Nagayama
- 4
-  日本語



**Global Storybooks**

[globalstorybooks.net](http://globalstorybooks.net)

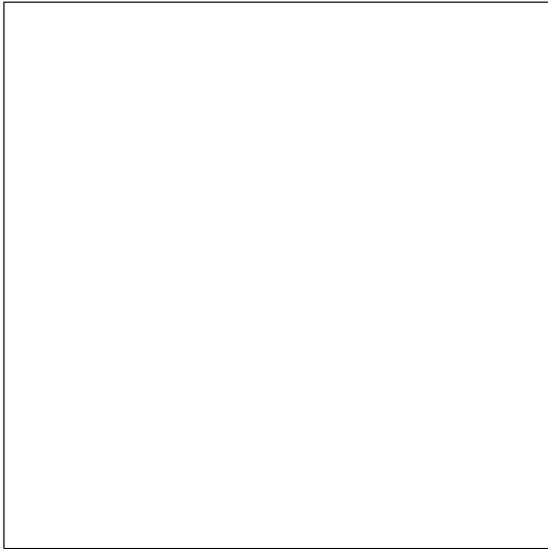
ミッドサイズの仕返し

-  Zulu folktale
- Wiehan de Jager
-  Akiko Nagayama



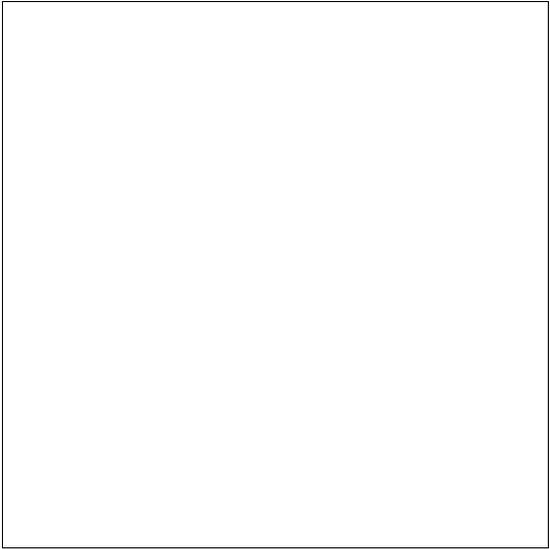
This work is licensed under a Creative Commons Attribution 3.0 International License.  
<https://creativecommons.org/licenses/by/3.0>

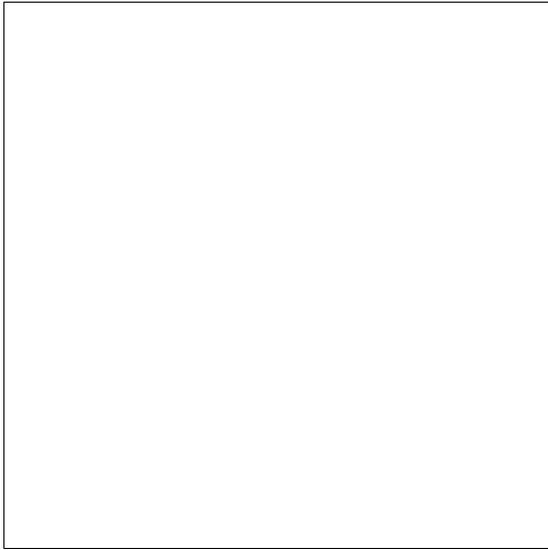




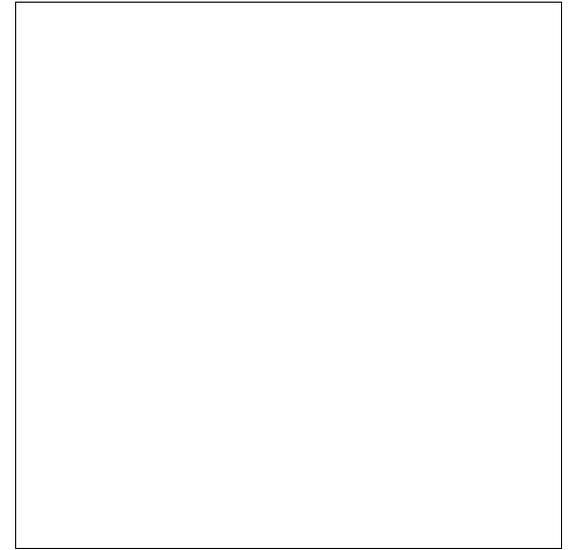
これはミツオシエという鳥ンゲデとギンギーレという名の欲の深い若者の話です。ある日、ギンギーレが狩りに出かけていると、ンゲデの鳴き声を聞きました。ハチミツのことを思うと、ギンギーレの口によだれが出てきました。彼は足を止め、注意して耳をすまし、鳥の姿を探し、そして頭上の枝に鳥がいるのを見つけました。「チテック、チテック、チテック」その小さい鳥は、次から次へと木を飛びながら、カタカタと音を立てました。鳥は、ギンギーレが後について来ているのかを確かめようと、時々止まりながら、「チテック、チテック、チテック」と鳴きました。

30分たつと、彼らはとつもなく大きな野生のイチジクの木にたどり着きました。ツグツグは枝の間をすごい勢いでピヨピヨと飛び回りました。それからツグツグは一本の枝にしまり、まるで「ここだよ。さあ、来てごらん。何をグスグスしているのかね?」と言わんばかりに、キンキールを見て、頭を上に向けてました。キンキールは木のふもとの方から一匹もミツバチが見えませんでしたか、ツグツグを信じました。



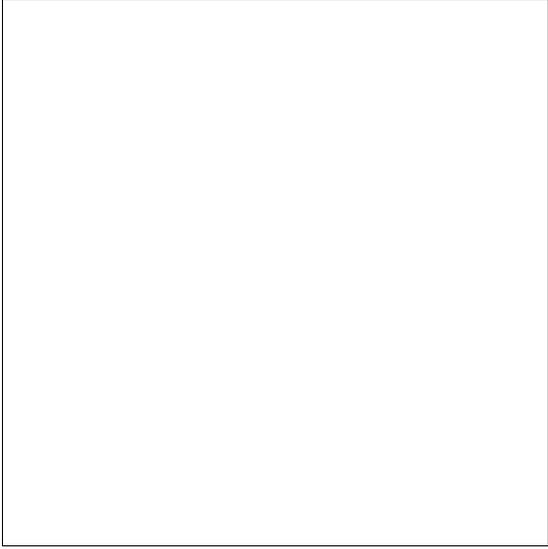


そこで、GINGERは狩り用のヤリを木のふもとに置き、乾いた小枝を集め、小さな火をおこしました。火が十分に燃えると、彼は火の中心に長くて乾いた木切れを差し込みました。この木は、燃えている間、たくさんの煙を出すことで特に知られていました。GINGERは煙が出ている木切れの冷たい方の端を歯にくわえながら、木登りを始めました。

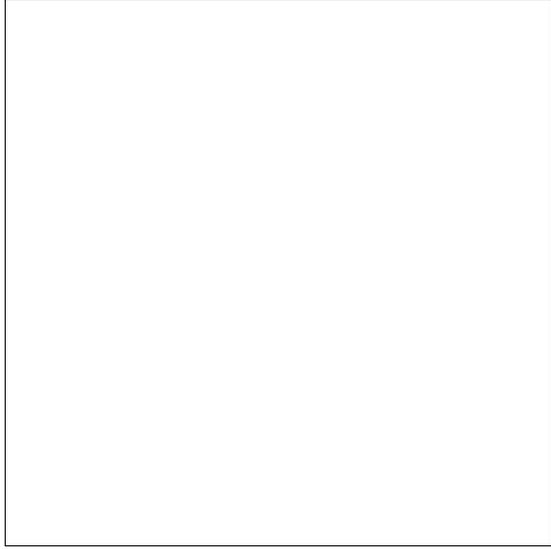


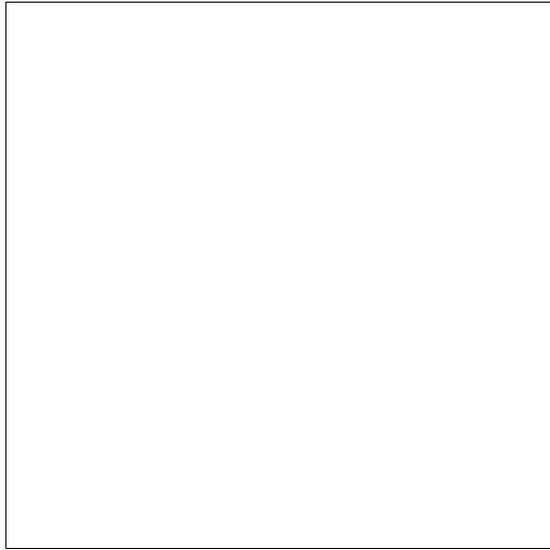
そういうことで、GINGERの子供達がNGEDの話を知ると、彼らはその小さな鳥に敬意をはらうのです。ハチミツを収穫する時はいつでも、彼らはハチの巣の一番大きい所をミツオシエのために必ず残してくるのです。

まもなくギンギールは忙しそうにミツバチの大きなゾンブントという音が聞こえるようになりました。彼らは、木の幹の穴一つまり彼らの巣穴から出たり入ったりしていました。ギンギールはミツバチの巣に手が届くと、その穴に煙の出ている方の木切れを押し込みました。ミツバチは、あわてふためき、不愉快になり、怒ってしまいました。彼らは煙がイヤなので、飛んで出てきました。でも、ミツバチはその時にはもうすでにギンギールに針で痛い目に合わせていました。

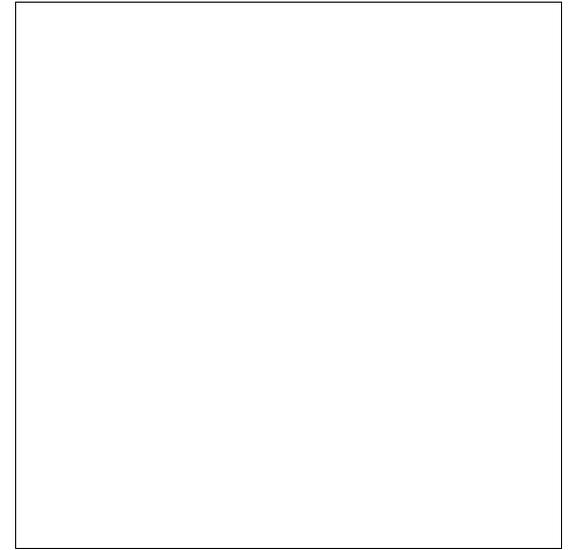


レヨウがギンギールをかぶりと食べる前に、ギンギールは大急ぎで木を降り始めました。あまり急いでいて、彼は枝に飛びそこね、地面にフサッと落ちて、足首をひねってしまいました。彼はできるだけ早くヨタヨタと足を引きずって歩きました。幸運なことに、レヨウはあんまり眠くてギンギールを追いかけることができませんでした。ミツオシエのソゲ子は仕返しをし、そしてギンギールは大切なことを学んだのでした。



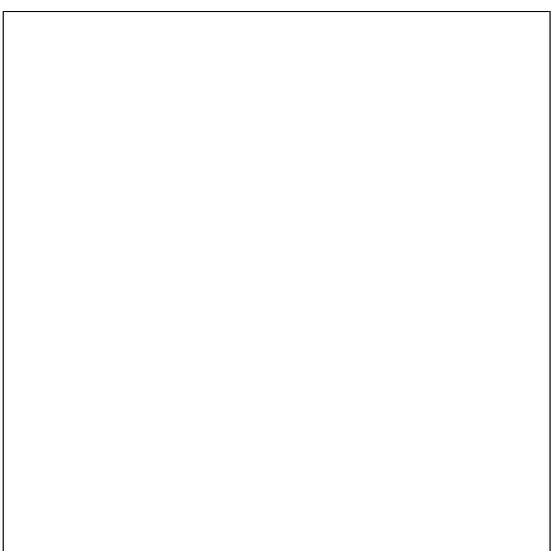


ミツバチが外に出た時に、ギンギーレは巣の中に両手を押し込みました。彼は、たっぷりのハチミツがしたたり落ちる両手一杯の重いハチの巣と、いっぱいハチミツ油と白い蜂の子を取り出しました。彼は肩にかけてきた小袋にハチミツの巣を注意深く入れ、木から降り始めました。

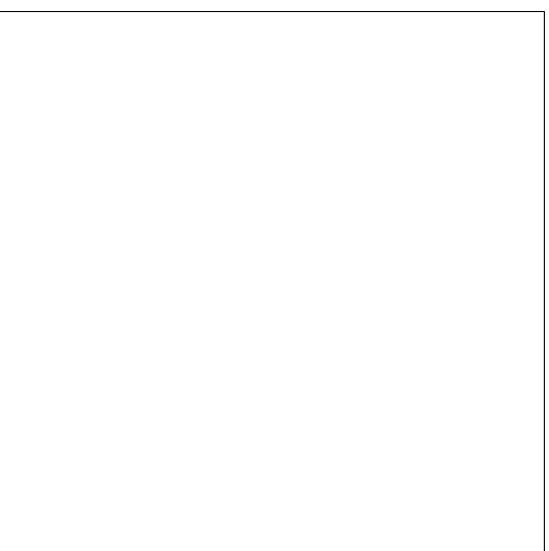


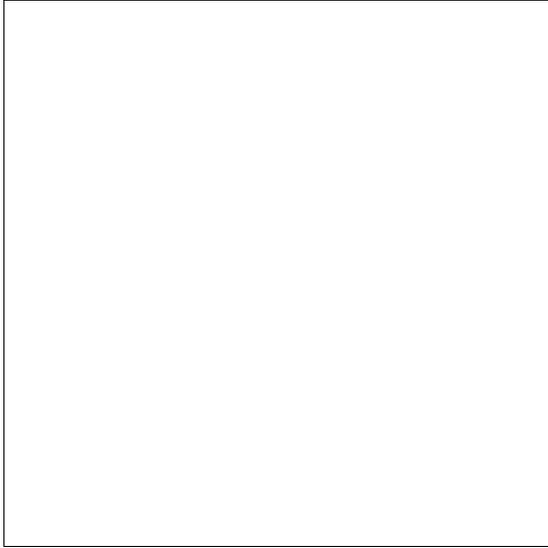
ギンギーレは、いつものブンブンという音がどうして聞こえないのだろうと不思議に思いながら、木に登りました。「多分、ハチの巣は木の中の深い所にあるのだ」と彼はひそかに思いました。ギンギーレは別の枝に体を移しました。するとギンギーレは、ハチの巣ではなく、ヒョウの顔とにらみ合うことになりました。ヒョウは自分の眠りが乱暴に邪魔をされたのでとても怒ってしまいました。彼女が目を細め、口を開くと、とても大きくてするどい歯が現れました。

数週間後のある日、ギンギールはツゲ子のハチミツを知らせる鳴き声をまた聞きました。彼はあの美味しいハチミツを思い出し、もう一度その鳥の後を熱心についていきました。森のはずれをずっとギンギールを連れて回った後、ツゲ子は立ち止り、大きな傘のようなトゲのある木の所で休みました。「あ、そうか」とギンギールは思いました。「ハチミツの巣はこの木の中にあるに違いないぞ。」彼は、素早く小さな火をおこし、けむりの立ち込めている枝を齧にくわえ、木登りを始めました。ツゲ子は座って眺めていました。



ツゲ子はギンギールがしているすべてを熱心に見つめていました。ツゲ子はミツオシエスという鳥に対する感謝のお供えものとしてハチミツの巣の大きな一切れを残してくれろと思つてギンギールを待っていました。ツゲ子は枝から枝をヒラヒラと飛び回り地面にだんだんと近づきました。やっとギンギールは木の下に降りました。ツゲ子は若者がいる近くの岩の上にとまり、若者のほうびを待ちました。





しょう。

しかしギンギーレは火を消すと、ヤリを取り上げ、その鳥を無視して、家路につき始めました。ンゲデは怒って「ヴィクトール、ヴィクトール」と大声で叫びました。ギンギーレは立ち止り、その小さな鳥を見つめて、大声で笑いました。「ハチミツがほしいのか、おまえ、オレの友達か？ フン！ でもぼくがぜんぶ仕事をしたのさ、すっかりハチにもさされてさ。だから、なんで、この美味しそうなハチミツの分け前を少しおまえにあげなくちゃいけないのかな？」それから、ギンギーレは歩いて行ってしまいました。ンゲデは怒り狂いました。これはンゲデが受けるような振舞いではありませんでした。やがて、ギンギーレはンゲデの仕返しを受けることになるで